

## 「三重大学国際交流 Days」の実践による可能性と課題

栗田 聡子

### Practice of “International Exchange Days” — Its potentials and Challenges

KURITA Satoko

〈Abstract〉

This report introduces “Mie University International Exchange Days” program that the Center for International Education and Research (CIER) held from December to January in this fiscal year. Regardless of limited human resources and budgets, 11 different events were successfully carried out, by the cooperation with other departments or individual teachers. For the total, more than 900 students and teachers participated in the events that had different purposes and targets, categorized into 4 types; ① Intercultural communication (between Japanese and foreign students), ② Regional contribution, ③ Global human resource development (for Japanese students), and ④ Experiencing Japanese culture (for foreign students). It is discussed which type of events should be more elaborated in non-Super Global Universities including Mie university, in order to satisfy the requirements of global education in this era.

キーワード：国際交流イベント、異文化交流、グローバル人材教育、地域貢献

#### 1. はじめに

国際交流センターでは毎年12月に「国際交流 Days」と称し、留学生と三重大生が共に交流する場を提供し、日本人学生や留学生が国際感覚を身につけることができるイベントを企画・実施している。著者が着年した2015年は、恒例の「海外短期研修報告会」と主に留学生を対象にした国際交流パーティのみの開催であったが、以前には「留学生カラオケ大会」をはじめ様々な企画がなされ、実施されていた記録も残っている。

国内の大学では、複数の国際関連行事が様々なかたちで実施されている。情報を検索したところ、国際関連行事の実施内容と目的は大まかに4つのタイプに分類できるようである。①留学生と一般学生との交流を促進する異文化交流型、②留学生（大学）と市民（地域）の交流を促進させる地域貢献型、③一般学生の国際感覚を向上させるグローバル人材育成型、そして④留学生に日本文化により親しんでもらう日本文化体験型である。

①から④は相互排他的な関係ではない。例えば、①は「異文化交流型」と名づけたが、

①を経験することは「グローバルな人材」として成長するためには欠かせない要因であるし、②「地域貢献型」のイベントも、双方(留学生と地域の方々)にとって異文化交流の場になることから、お互いに重複する部分がある。

国内の大学において、①の例としては、関西学院大学の「留学生 WEEK」があげられる。ウェブサイトによると、「留学生 WEEK」の目的とは、「留学生のことを知ってもらい、留学生や留学生の出身国について理解を深めてもらうこと、留学生に日本についての理解を深めてもらうこと、また、イベントを通して、留学生と一般学生の交流を促進していくこと」(関西学院大学 HP、2017)とある。留学生について日本人学生の理解を高め、相互に交流する典型的なイベントである。一方で、東京農工大学の「グローバルカフェ」は、毎週実施されており、「留学生と日本人学生が学び合い、楽しむための交流の場」(東京農工大学 HP、2017)として通年で実施されているイベントである。

②の「地域貢献型」の例としては、大規模なもので 30 以上の屋台が並び数千人の来場があるという「東北大学国際祭り」、「立命館でアジアとつながる国際交流フェスタ」等があげられる。東北大学国際祭りのフライヤーには、「様々な国の美しい伝統衣装が楽しめるショーや、日本ではなかなかお目にかかれない歌やダンス、祭りを盛り上げてくれるストリートパフォーマンスがあなたをお待ちしております」(東北大学 HP、2017)とあり、複数の公益財団からの寄付金に助成された大規模なイベントであることがわかる。立命館大学のイベントも、阪府・大阪府教育委員会・茨木商工会議所など、地域の公共団体が連ねている。二つの大学ともに、文部科学省「スーパーグローバル大学創成支援」事業の採択を受けている。

「グローバル人材育成型」の③であるが、異文化交流を除いた内容に限定した場合、日本人学生対象の語学研修や交換留学の報告会・説明会として通年で実施されていることが多いようである。最後の留学生対象の④日本文化体験型イベントだが、大規模な例としては京都大学の留学生ラウンジ「きづな」のように、通年で実施している大学が多いようである。本学でも留学生が日本文化や地域に親しむイベントを定期的に企画・提供している。

## 2. 「国際交流 Days」に向けての課題

本年度は、12月に11のイベント(イベント内の項目も含めると総数16)と多くのイベントを企画・実施した。恒例のイベントである「海外研修報告会」「国際交流パーティ」「国際親善スポーツ大会」だけでも特に問題はなかっただろうが、それでは日本人学生が参加できるイベントが少なく、留学生と交流する機会もほとんどない。日頃から国際交流センターに対して「よく知らない」「留学についての情報が集めにくい」等のネガティブ

な意見を日本人学生から聞いていたこともあり、「国際交流 Days」（以下、Days と表記）をセンターの「広報」を担う行事としても活用することにした。

開催にあたり主な課題は人員と予算不足、そして参加に消極的な学生の集客であった。人員不足は、昨年度、日本語教員 3 名が地域人材教育機構へ異動したこともあり、国際交流センターの専任教員が著者 1 名となったことにある。実施の様々な段階で事務チームの約 3 名が中心となる役割を担ってくれたので大変助けられたが、イベントの企画を立案する時間は足りなかった。というのは、同年 10 月中旬に国際交流センターが中心となり「Tri-U 国際ジョイントセミナー&シンポジウム」（国際交流も兼ねた研究発表会）のホスト校として約 150 名ものゲストを海外から迎えるイベントを開催していたからである。Days の準備は実質的に 11 月からの数週間で、予算も極限られていた。

低予算・人員不足の壁を越えるには、他学部の教員や学生団体の協力が欠かせない。センター兼務教員以外にも、Days の実施内容と趣旨に合う専門性や企画力を持ち、センターの運営に対して理解がある教職員の方々に積極的に協力を要請していった。例えば、昨年新たに実施して好評であった教育学部教員（林朝子准教授）の指導による「書道体験」や国際交流系の学生サークルの協力による「世界の料理作り」イベントを、今年度も継続して実施することにした。受身的なイベントだけでなく、時代に合う「体験型」のイベントを増やすことも本年度のもう 1 つの課題であり、上記 2 つのイベントはその目的を満たす内容であった。

第 3 の課題、日本人学生の集客であるが、これは三重大学に限ったことではなく各大学のイベント主催者を悩ませる問題であると聞いている。特に大学が主催するイベントの場合、就職や資格に直結するような内容でなければ、全学一斉メールで知らせても参加する学生は非常に少ないのが全般的な現状である。昨年の Days では、新たに「外国映画鑑賞会」として 4 本の外国映画を無料で観るイベントを実施したのだが、全学一斉メールで周知したのにもかかわらず各映画の参加者は 10 名前後に終わった。参加した学生の感想から実施に意義がある事は感じていたことから、今年は試験的に他学部の先生方の協力で「授業として」実施するなどの仕掛けを施した。

### 3. 2017 年度 「三重大学国際交流 Days」の実施結果

#### 3-1. 全体の実施概要

次に、本年度実施した「国際交流 Days」のイベント内容を一覧とともに報告する。

表 1 に記載したように、11 のイベント中、分類の①異文化交流型は 2 件、②地域貢献の主旨を含むものは 4 件、③グローバル人材育成型は 6 件、④留学生のための日本文化体

表 1. 2017 年度 三重大学国際交流 Days イベント一覧

	日程	イベント	イベント分類 ①～③	主な対象	体験型	授業	共催 協力	参加人数
1	12/4・5	エチオピア水墨画展・ 世界の民族衣装体験会	②③	全学 地域	○		JICA三重 デスク	17名
2	12/5	講演会(JICA三重/松林医師)	②③	全学 地域				16名
3	12/4～13	映画鑑賞会4作品	③	全学		2作品	教育学部 他	217名
4	12/7	書道体験会	④	留学生	○		教育学部	16名
5	12/8	海外研修報告会	③	全学			人文学部他	44名
6	12/10	国際親善スポーツ大会	①②	留学生 (市民参加)	○		生物資源 学部	34名
7	12/11	十二単着装体験	②④	全学 地域	○		大学地域 貢献事業	54名
8	12/11	伝統芸能披露会(国際交流パーティ)	①④	留学生	○			191名
9	12/12	ドイツ紹介・留学説明会	③	全学		○	人文ドイツ 文学系	92名
10	12/14	世界の料理作り	①③④	全学	○		学生団体	32名
11	1/10	JICA ボランティアセミナー	③	全学		○	学生団体	209名

(注：イベント分類 ①＝異文化交流型 ②＝地域貢献型 ③＝グローバル人材育成型 ④＝日本文化体験型)

体験型は 3 件であった。4 つのイベントは複数の目的を含んだ。

当初の日本人学生が参加できるイベントを増やすという目標は達成したが、留学生と交流できるイベント (①) が 3 件だけだった点は残念である。イベントに参加した総人数はのべ 922 名にもものぼり、昨年の 4 倍以上であった。これは、外国語映画鑑賞会の一部や JICA ボランティアセミナーを複数の授業と合同開催したことによる。「体験型」のイベントを増やす、という課題も 11 イベントのうち半分以上の 6 つのイベントが体験の要素を提供したことで達成された。ほとんどのイベントが他学部との共催や教員個人、学生団体の協力のもと実施されたことで、内容も充実したものであったと思う。各イベントの概要と実施結果は次のとおり。

### 3-2. 各イベントの概要と実施結果

#### (1) エチオピア水墨画展 ～墨絵で描く浴びシニア高原の生活とところ～

&世界の民族衣装を着る体験会 (12/4/・5 場所：環境情報科学館 1F)

元 JICA 専門家で、現在、志摩病院小児科部長の松林信幸医師がエチオピアで描かれた数多くの水墨画の展示会を催した。隣のスペースでは、JICA 三重デスクの参加で JICA

事業の紹介をするブースとエチオピア展示に合わせてアフリカを中心とした民族衣装 10 点ほどを学生が実際に着ることができるよう展示してもらった。興味深そうに水墨画を眺める学生や、様々な民族衣装を着て楽しそうに記念撮影をするグループが見られた。



(2) 講演会：「JICA ボランティア体験談」「ザンビア・タンザニア・エチオピアでの国際医療の軌跡」  
(12/5 場所：環境情報科学館 1F)

昼休みの時間帯を利用して、上記(1)の JICA 三重デスクの代表・山崎三智氏による青年海外協力隊員としてのボランティアの体験談、元 JICA 専門家の松林医師によるエチオピアの文化や国民性、国際医療協力を通じた様々なエピソードをお話しいただいた。講演後、熱心に質問をする学生らもいた中で、地域からの参加は多くなかった。今後は、地域住民への広報方法も課題である。



(3) 映画鑑賞会 (12/4~13 場所：メディアホール)

昨年に引き続き、12月4日から13日まで4本の映画鑑賞会を催した。本年度は昨年ミニシアター系の公開でありながら200万人もの動員数で話題になった日本のアニメ映画「この世界の片隅に」も含んだ。各映画の鑑賞後にはアンケートをとり、映画の感想と留学に関する興味等について回答してもらった。

～世界の見方が変わる12月～  
国際交流DAYS Film Festival 12/4~13 @Media Hall

 「この世界の片隅に」 <i>In This Corner of the World</i> 制作：日本 2016年 139分 音声・字幕：日本語 12/4 (Mon) 16:30 - 19:00 主催：国際交流センター (CIER)	 「私を離さないで」 <i>Never Let Me Go</i> 制作：英 2016年 105分 音声：英語 字幕：日本語 12/6 (Wed) 16:30 - 18:30 主催：* 宮地信弘先生 (教育学部) から映画の紹介があります。 共催：教育学部	 「愛を読むひと」 <i>The Reader</i> 制作：米/独 2008年 124分 音声：英語/独 字幕：日本語 12/7 (Thurs) 12:10 - 14:30 主催：* 大河内朋子先生 (人文学部) から映画の紹介があります。 共催：人文学部ドイツ語ドイツ文学系	 「ブラッド・ダイヤモンド」 <i>Blood Diamond</i> 制作：米 2006年 143分 音声：英語 字幕：日本語 12/13 (Wed) 16:30 - 19:00 主催：* 学生団体Synergyから映画の紹介があります。 共催：地域人材教育開発機構 学生団体Synergy
--	--	---	--

「映画鑑賞会」イベントで使用したフライヤー



表 2. 映画鑑賞会 4 作品の概要と参加人数

映画タイトル	製作国(年)	授業	自主参加	教職員	計	共催
「この世界の片隅に」	日本(2016)	68(留)	9(学生)	4	81	
「私を離さないで」	英(2016)		10(学生)	3	13	教育学部
「愛を読む人」	米/独(2008)	100(学生)	7(学/留)	5	112	人文学部ドイツ文学系
「ブラッド・ダイヤモンド」	米(2006)		5(学/留)	6	11	地域人材/ 学生団体 Synergy
		168	31	18	217	

「この世界の片隅に」は長崎を舞台とし、戦争が日常の生活を奪っていく過程と人々の絆を描いている。授業で参加した留学生の人数は 68 名で、自主的な参加は大学院生を含む 9 名と昨年どおり少なかった。だが、「今日の自分の生活がとても平和なことに感謝して、今後も日々後悔のないよう一生懸命に生きていこうと改めて感じました。戦争の悲惨さを痛感しました」と書いた学生のように、心を動かされた参加者が多かったようである。留学生の多くも、アンケートに「(とても)面白かった」と回答していたが、「方言がよく使われていたので分からなかったところがたくさんあって、ちょっと残念でした」とある留学生が書いたように、方言が多い映画を選択したことは反省点であった。加えて、「中国人は感動しない映画です。日本人が戦争で中国にしたことを忘れてる」とのコメントもあり、戦争を舞台にした日本映画を留学生、特にアジアからの留学生を対象に見せることの難しさを改めて感じた。この課題に関しては、また改めて検討していきたい。

「私を離さないで」は、カズオ・イシグロの小説をもとにイギリスで製作された映画である。センター兼務教員で英文学専門教員(教育学部 宮地信弘教授)に相談し、推薦いただいた多くの映画の中から選択した。選択理由は、昨年ノーベル文学賞を受賞した話題性と映画の質の高さ、臓器提供を中心とした様々な問題を提起していることである。鑑賞前に、宮地教授からカズオ・イシグロ作品と映画の見所、そして小説でしか描かれていないシーン等について 15 分ほどの講義をしていただいた。参加学生数は多くなかったが、映画鑑賞は様々な感情や疑問を喚起したようで、上演後も映画の内容について話し合い、教員に質問する学生らが残っていた。感想の一部は以下のとおり。「『生と死』がとても身近にある環境の中でも、そこに生きる意味や愛といったものを求める姿に考えさせられた」(教育学部 1 年生) “Ishiguro Kazuo's novels are always great and interesting” (留学生)

「愛を読む人」は、大戦中ナチス党で女性看守として働いた過去のある女性と少年との

関係を軸に、人間の罪と尊厳等をテーマにしており、人文学部のドイツ文学専門教員（大河内朋子教授）により選ばれた。教養教育のドイツ語授業3クラスと著者の授業「メディアと日本」の合同授業として昼休みから上映し、参加人数は100名を超えた。授業以外の参加者は約10名であったが、他学部の教員からの参加もあり、テーマに対する興味の高さがうかがえた。上映前には「女性看守とナチス党について」大河内教授による15分ほどの講義があり、学生らは映画の歴史的な背景を学んだ。学生らにとって、授業でなければおそらく観ることがない重いテーマを持つ映画であったが、大半の学生が「(大変) 面白かった」と回答した。「複雑な心情が絡み合っていて、とても考えさせられる話だった」という感想や、「法律関係のシーンがあったので見入ってしまった」など、専攻とからめて鑑賞した学生もいた。授業履修者には映画について課題が出ており、「映画の主テーマは何だと思うか?」「そのテーマに関してどう考えるか?」という設問への回答が義務づけられた。

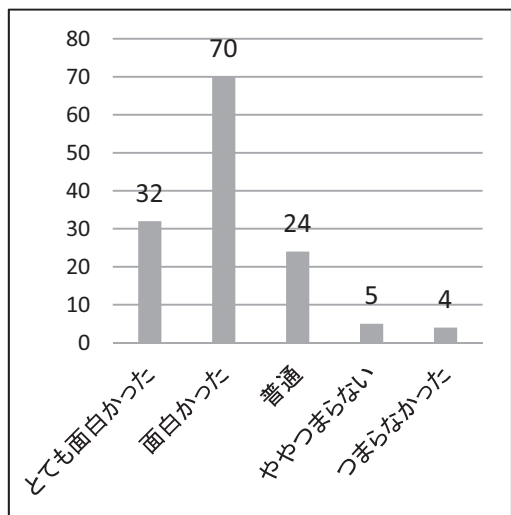


「愛を読む人」鑑賞前講義

最後に上映した映画は「ブラッド・ダイヤモンド」であり、学生団体 Synergy とその顧問（正路真一講師）が所属する地域人材教育機構との共催で実施した。Synergy は近年結成された学生団体で、複数の招待講演を行っており、大学内外から参加者を集めている。10月に招いた鬼丸昌也氏（NPO 法人テラ・ルネッサンス）が紹介した映画がこの映画であり、ダイヤ取引の裏に隠された紛争と利権を取り上げた社会派サスペンスである。「ぜひ観てみたい」と希望した学生が中心となって上映しただけあり、鑑賞した学生らの満足度は高かった。従来のように参加人数が少なかった点は残念であったが、学生団体と他学部の協働で実施することは意義があると考えている。

4本の映画を上映した後、映画についてアンケートをとり、135名から回答を得た。グラフ1. が示すように、4本の映画に対する評価は概ね良く、「(とても) 面白かった」と回答した学生が多かった。「このような英

グラフ1. 鑑賞した映画への感想 (N=135)



語鑑賞会を開催してほしいですか？」という問いには、「(すごく) してほしい」という回答の割合が高く (約 70%) 来年度も実施する予定である。

(4) 書道体験会 (12/7 場所：教育学部)

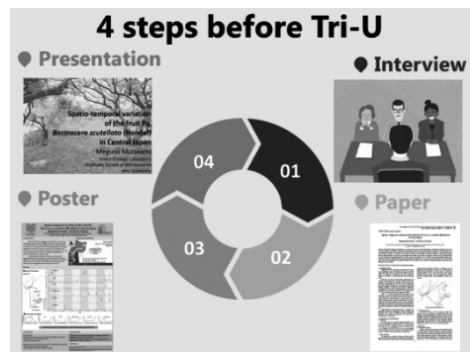
昨年はじめて実施して好評であった留学生を対象とした書道の体験会を今年も教育学部教員(林朝子准教授)の指導のもと実施し、12名の参加があった。硯の使い方や筆の持ち方、姿勢などについて講義があり、書道の基本である「とめ、はね、はらい」を学んだ後、手本を参考にしながら熱心に練習した。今回も教育学部の学生6名がボランティアとして活躍してくれ、各留学生に丁寧な指導が行き届いていた。「難しい！」と言いながらも見事な字を書く留学生もおり、各々が好きな漢字を書いた作品は来年の素敵なカレンダーとなった。



(5) 海外研修報告会 (12/8 場所：環境情報科学館 3F)

毎年 Days の恒例の行事として、8日の昼休みに本学主催の海外研修の参加者が各プログラムの特色や成果などをグループごとに発表する報告会を実施した。実際の参加者でなければ報告できない、熱のこもった魅力的な内容ばかりであった。「Tri-U 国際ジョイントセミナー」は大学院生からの報告であり、研究の英語発表というチャレンジを経験した成果があらわれていた。

発表スライドから (Tri-U)



各部署から担当教員の参加もあり、和やかな雰囲気のもと実施されたが、一般学生の集客は来年度に向けての課題として残った。報告内容は以下の通り。



表 3. 本学主催の海外短期研修の報告内容一覧

	研 修 名	研 修 国	時 期	主 催
1	ブリティッシュ・コロンビア大学 英語語学研修	カナダ	夏期	国際交流センター
2	天津師範大語学研修&文化交流	中国	春期	教育学部
3	オックスフォード大学 ハートフォードカレッジ	イギリス	夏期	人文学部
4	英語特別プログラム： シェフィールド大学	イギリス	春期	教養教育機構
5	ベトナム・フィールド・スタディ	ベトナム	春期	国際交流センター
6	Tri-U 国際ジョイントセミナー& シンポジウム	インドネシア	10月	国際交流センター

#### (6) 国際親善スポーツ大会

(12/10 場所：津市河芸体育館)

スポーツイベントは毎年恒例であり、本年度も国際交流センター兼務教員である生物資源学研究科の教員(王秀崙教授)指導のもと、留学生らが地域の方々とソフトバレーボールを楽しんだ。本大学からは16名(教員1名、外国人研究者1名、留学生14名)が参加し、力いっぱい身体を動かして親睦を深めた。今後は、日本人学生の参加も検討し、留学生との交流の場として提供できればと思う。



#### (7) 十二単衣から知る日本文化の魅力

(12/11 場所：三翠館)

本年度、新たな試みで「十二単衣の着装体験」を三重大学地域貢献事業(人文学部 田中綾乃准教授)との共催で実施した。「蕪心の季」(特定非営利活動法人)、小林豊子きもの学院の協力で、近代・平安の十二単衣と男装用に束帯が提供された。地域にも三重大学 HP で周知し参加を募ったが、参加は留学生が中心であり、14ヶ国から54名にも



のぼった。また、本イベントは日本文化の魅力を発信する beyond 2020 プログラム (文化庁) の認定も受けた。

平安の衣装では、学部生と留学生がそれぞれ緊張した面持ちでモデルを務め、衣装姿を披露した。計 9 名の着付け師が色の異なる 12 枚の衣を着せていく艶やかな様を見学して講義を受けた後、着装体験を行った。



残念ながら日本人学生からの参加は少なかったが、参加者は、写真撮影を楽しみ壮麗な日本の伝統文化の世界を堪能した。普段使用されることが少ない本大学の歴史的建造物である「三翠会館」の 2 階和室を使用したことは、イベントの雰囲気盛り上げただけでなく、大学資産の有効利用の点で良かったと思う。

イベントに対する参加者の反響は大きく、以下はアンケートの一部である。「英語通訳」を望んだ留学生もおり、今後の課題として検討していく。

「十二単を体験できて、大変よかったですと思います。まるで大河ドラマのようでした。」

「十二単イベントはとても良かったです。日本の親戚も、ブラジルにいる母も、とても良い経験だと言っていました」「三重大学で、たくさん日本の文化を体験できますから、本当に楽しいです。もし他の大学でしたら、この体験はないかもしれませんと思います」

“It was such a great opportunity to participate in that event. It was really interesting, admirable, culture-rich and authentic. I was thrilled by how humble those sensei when they were dressing up the queen with that kimono, that they paid special attention and care to each and every step. It was an amazing event that we could taste the essence of old-aged Japanese tradition and culture. Just one recommendation. It would help us a lot more to understand if they could explain in English.”

#### (8) 国際交流パーティー (12/11 場所：三翠小ホール)

恒例の国際交流パーティー (伝統芸能披露会) を今年度も開催した。司会は留学生の支援サークル「てらこや」(顧問：地域人材教育機構 福岡雅子教授) に担当してもらい、駒田学長による挨拶の後、インドネシア、タイ、アフガニスタン等の留学生グループが伝統芸能を披露した。留学生を中心に、国際交流の支援活動をしている日本人学生・教職員、ハイデルブルク大



学京都オフィスからのゲストなど合わせて約 190 名が参加する大規模な国際交流の場となった。最後には本大学応援団の会場全体に響き渡る力強い演舞とパフォーマンスで締めくくられ盛会のもとに終了した。今後も継続して実施するイベントであるので、パフォーマンスや交流を楽しむ以外に他の内容や意義を加えることができないか検討していければと思う。

(9) ドイツでの学生生活・ハイデルベルク留学説明会 (12/12 場所： 教養教育 3 号館)

ハイデルベルク大学は本学と 2008 年より協定関係にあり、双方向的に交換留学が活発に行われている。今回は、ハイデルベルク大学京都オフィスからの申し出により、Sabine Schenk 氏からドイツにおける学生生活とハイデルベルク大学への留学についてお話いただいた。講義は、ハイデルベルク大学との窓口である教員(人文学部：大河内朋子教授)の協力のもと、教養教育機構のドイツ語クラス(履修生：約 80 名)で実施された。



Sabine 氏によると、ドイツの大学では常時学生の 2 割以上が留学中であり国家の方針として留学を積極的に推進していること、進級が極めて難しいことなど、興味深い情報が多くあった。ハイデルブルク大学の日本語学科で学ぶド



イツ人学生が日本からの留学生向けに作成した大学の動画も流れた。日用品が買える大型スーパーや学食の紹介、リサイクルの仕方など、留学時に役立つ情報が満載で、三重に交換留学生として学んでいたドイツ人学生も登場した。講義の後、大河内教授による来年度 10 月実施のドイツ研修旅行の紹介があり、続けてドイツ留学の相談会を実施。相談会では活発な質疑応答が交わされ、留学を実現できそうな予感に高揚した学生らの表情が印象的であった。

三重大学では、第 2 外国語としてのドイツ語教育が特に充実していることから、ドイツ留学をする学生が他国(フランスや中国)よりも圧倒的に高い。今後は増加傾向にある中国やフランスからの留学生との均衡も考慮し、日本人学生に対してバラエティに富んだ留学先の説明会を検討していきたい。

(10) 世界の料理を作ろう! (12/14 場所: 看護学科棟調理室)

昨年、日本人学生と留学生との交流を目的に新たに企画した「体験型」のイベントであり、参加者の好評を博したことから引き続きの開催となった。「世界の料理作り～Let's Cook Your National Cuisine!」と題して、国際交流サークル「おいでやす」(人文学部)のメンバーの協力のもと約 30 名が参加し、5 カ国の料理作りに挑戦した。韓国のトッポoggi、ドイツのポテ



トパンケーキ、タイのヤムウセン、ブラジルのブリガデイロ(菓子)という各国料理に加え、今年は日本料理(海老しんじょう)も紹介、留学生が和食に親しむ機会にもなった。インドネシア、韓国、台湾、中国、タイ、ドイツ、ブラジル、ブルガリア、ベトナム、ラオス、日本と、11 カ国の学生と一緒に協力し合いながら料理を作り、味わい、後片付けをすることで、楽しみながらも質の高い異文化交流を提供できる体験イベントであった。可能であれば、定期的にイベントとして実施できればと考えている。

(11) JICA ボランティアセミナー ～国際協力というシゴト～

(1月10日 場所: 生物資源2F大講義室)

主に生物資源学部の学生を対象とし、本大学と協力提携の関係にある JICA の活動を紹介するイベントが企画され(吉松隆夫教授)、Days 行事の一つとして組み込まれた。JICA 中部による青年海外協力隊についての概要説明に続き、津市出身でアフリカのガボン共和国に村落開発普及員として派遣経験のある瀬古彰彦氏の講演



があった。現地で初めて体験した米作りと数々の困難、価値観の変化など、和やかでありながら情熱を感じる内容であり、海外支援に興味を抱いた学生も多かったのではと思われる。今後は、地域貢献を望まれる本大学の役割も意識しながら、海外ボランティアに興味がある方々を対象に JICA の「シニア海外ボランティア」(40～69 才対象)を紹介する情報を発信する場を提供することも検討できればと思う。



#### 4. まとめと考察

本編では、三重大学で本年度実施した「国際交流 Days」のイベントの概要と実施結果について述べた。恒例の国際交流パーティと海外研修報告会を含み計 11 種類のイベントを実施し、参加者はのべ 900 名を超えた。人員不足と低予算、短い準備期間という課題を抱えながら数多くのイベントを実施できたのは、国際交流チームとの連携だけでなく、協力要請に快諾してくれた他学部の教員や学生らのサポートのおかげである。「国際交流 Days」という本来の実施意義や目的について深く思考する時間の余裕はなかったが、少なくとも日本人学生の間での「国際交流センター」という組織、「国際交流 Days」というイベントに対する認知度を高めることはできたと思う。今後は、ただ数多くのイベントを実施するのではなく、Days の実施目的を明確にする必要がある。

前述したように、国内の大学で実施している国際交流イベントは主に 4 つに分類できる。①留学生と一般学生との交流を促進する異文化交流型、②留学生と市民（地域）の国際交流を促進させる地域貢献型、③一般学生の国際感覚を向上させるグローバル人材育成型、そして、④留学生に日本文化により親しんでもらう日本文化体験型である。スーパーグローバル大学（文科省 2014）としての活動指針もない大学は、4 つの型の中でどれを最も重視すべきなのか。もちろん、300 名を超える交換留学生を統括する組織としては、留学生のための催事を開催することは必至である。この意味では、昨年引き続き実施した「書道体験」や日本人学生との交流を促進する「世界の料理イベント」に加えて、「十二単着装体験」という新しい企画を加えることで、三重大学での留學生活の充実度を高めることができたと思う。

だが、スーパーグローバル大学でなくともグローバルな視野を持つ人材を育成することは、この時代大学の重要な役割である。「グローバル人材」には様々な定義があるが、近年グローバル人材の育成に関する提言で注目を浴びている出口治明氏（立命館アジア太平洋大学学長）によると、グローバル人材とは簡潔に言えば、「世界中のどこでも生きていける能力を持つ人間」であり、その能力を持つために最も必要な学びとは、「人に会う、本を読む、旅をする」ことであるという。それは、社会通念で物事を考えるのではなく、世界をありのままを見て、ゼロから自分の頭で考える事ができるようになるためである。（出口，2017）。出口氏の言葉を借りると、日本人学生が留学生と交流する場合は「人に会う」とことと通じ、留學という「旅」の報告を聞く「海外研修報告会」は旅への第一歩ということになるであろう。同氏の意味する「本を読む」ことは、古典のテキストを読み込んで自分で思考を整理する、という個人的な学びのことであるので、映画鑑賞とは異なる教養のインプットである。だが、未知の世界や歴史的な出来事、社会・地球規模の問題・人間の



根本的問題等について思考させる機会は異なった形ではあるが映画というメディアも与えることができる。それだけでなく、映画は同一空間の中での共通体験を可能にし、鑑賞後はテーマについて話し合うこともできる。昨年度に引き続き映画鑑賞会を実施したが、アンケート結果から開催の意義は比較的大きいと判断した。各映画が個々の学生に残した問題意識や感情に伴う予算支出は極めて低い上に、留学にかかる質問を含めてアンケートを実施する機会としても意義がある。ここで詳細を報告するスペースはないが、映画に感動する心と留学に対する意識には相関関係があるようで興味深い。今後は、今年度の映画鑑賞会で協力していただいた人文学部や教育学部だけでなく他学部との連携も視野に入れて、実施することができれば幸いである。

今年度の「国際交流 Days」で特に足りなかったのは①異文化交流型である。今回は、世界の料理イベントには約 10 名の日本人学生が参加したが、他のイベントと同じく積極的な応募数は多いとは言えなかった。日本人学生の集客は彼らの「内向き志向」と共に大きな課題ではあるが、今後は、Days という枠組の中だけでなく、双方のグループが交流できる授業を増やしていくことができればと思う。この実現のためには、他学部の協力も必要になるだろう。

Days の新しい試みとしては、地域に開放したイベントを実施したことである。JICA の元専門家による水墨画展と講演会、十二単衣の着装体験イベントを開放したが、時間的にも方法的にも広報が行き届かなかった面もあり、多くの参加は実現しなかった。今後は「地域貢献」が望まれる地方の国立大学の役割をさらに意識し、留学生との交流を通じて地域とつながることのできるイベント企画が必要である。

## 5. さいごに

大学の「国際交流センター」は本来様々な可能性を持ち、多くの役割が望まれる部局であるが、現在の三重大学では専任教員が著者 1 名であることで、他学部や事務チームの協力を得ながらも実現できることは極めて限定される状況にある。非スーパーグローバル大学であってもグローバル人材の育成が大学に望まれる時代にあり、今後は地方の(国立)大学がグローバル教育を推進できる枠組みやシステムについて正面から考える必要があるだろう。「国際交流 Days」というイベント週間を日本人学生や留学生を対象とするだけでなく、大学の教職員がこの課題について正面から考える機会とすることができればと思う。

## 謝辞

2017年度の「国際交流 Days」実施にあたり、ご協力いただいたすべての教職員と学生の皆様に心より感謝を申し上げます。

## <参考文献>

関西学院大学（2017）日本語教育センター「学生 WEEK」

[https://www.kwansei.ac.jp/cjle/cjle\\_009976.html](https://www.kwansei.ac.jp/cjle/cjle_009976.html)（2017年12月25日アクセス）

出口治明（2017）「本物の思考力」小学館.

東京農工大学（2017）国際交流課「Global Café」

<https://web.tuat.ac.jp/~intl/ja/globalcafe/>（2017年12月25日アクセス）

東北大学（2017）「第32回東北大学国際祭り」

<https://www.tohoku.ac.jp/japanese/2017/04/event20170414-01.html>（2017年12月25日アクセス）

文部科学省（2015）「スーパーグローバル大学創成支援」[http://www.mext.go.jp/a\\_menu/koutou/kaikaku/sekaitenkai/1360288.htm](http://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/kaikaku/sekaitenkai/1360288.htm)（2018年1月3日アクセス）